

鳥取県知事

平井伸治様

# 鳥取県への提言

令和元年10月24日

とっとり創生若者円卓会議



## 〔はじめに〕

私たちとっとり創生若者円卓会議メンバーは、今年度の円卓会議のテーマである「文化財の利活用を通じたふるさとの「誇り」づくり」と「プラスチックごみ排出ゼロに向けた県民運動の広がり」に共感し、一緒に鳥取県を盛り上げていきたいという熱い想いをもち、一丸となって取り組んできました。

この度の提言を行うにあたっては、若者ならではの視点を大切にしつつも実現可能な内容であること、生の情報を求め積極的に地域に飛び出すことを心掛けました。

各メンバーから出た意見と現地視察等で感じた課題をもとに、アイデアを出し合い提言書としてまとめました。意見やアイデアを幅広くまとめるのは大変でしたが、一つひとつの提言に対し話し合いを重ね、納得できるものができたと考えています。

私たちの提言が、鳥取県の活力ある未来へつながる一助となれば幸いです。

最後に、私たちの円卓会議メンバーとしての任務はこの提言書をもって終わりとなりますが、今後とも鳥取県に誇りをもち、鳥取県から新時代を創るお手伝いをしていきたいと思いをします。

令和元年10月24日

令和元年度 とっとり創生若者円卓会議メンバー 一同

## 〔メンバー（10名）〕

○テーマ1：文化財の利活用を通じたふるさとの「誇り」づくり 5名

木下 裕一朗 田畑 英野 森田 貴洋 井上 玲美 長谷川 豊

○テーマ2：プラスチックごみ排出ゼロに向けた県民運動の広がり 5名

上村 拓海 牧園 善樹 丹羽 祥太 實延 美彩 宮下 諒太

## 〔提言書1〕

### テーマ1:文化財の利活用を通じたふるさとの「誇り」づくり

#### 【提言の背景】

文化財とはその地域らしさを表すものであり、指定や登録などにされたものだけが文化財であるわけではない。したがって、文化財はその地域の人々の生活の中に必ずあるものだが、その存在が地域の人々に知られていないことが多い。身近にありすぎて、それぞれの文化財的な価値に気が付いていないとも言える。

私たちは、鳥取県中部地区におけるフィールドワークで、いくつかの文化財を訪ね、それを守っている人々の話を伺った。皆さんが自分たちの携わる文化財についての思いを語ってくださり、文化財を誇りに思う気持ちを感じ取ることができ、私たちも提言に向けての思いを強くした。フィールドワーク訪問前に地域の方々が草刈りを行われていた所もあり、やはり文化財について話を聞いてもらえること、知ってもらえることは、文化財を守る人々にとっても嬉しいことなのではないかと感じた。その中で、文化財を後世に残していくための仕組みが確立されていなかったり、個人のみで利活用を考えることは難しく、やはり周囲の協力がなければ続けていくことは困難であったり、同じような文化財を守る人同士が関わる機会はあるが狭い範囲での交流になったりと、文化財を守り伝えていく上での課題が多くあることがわかった。

私たちは、どうしたら文化財を今後守り伝えていくことができるのか、フィールドワークや意見交換を重ねる中で考えた結果、文化財の利活用を考える前にまずは地域の人々にその地域の文化財を知ってもらうことの重要性を感じ、また文化財に携わる人同士の交流により、今後文化財を守っていく上でのヒントのようなものが生まれてくるのではないかと考え、その2つの視点を今回の提言書にまとめた。

#### 【グループ活動】

○鳥取県中部地区におけるフィールドワーク



## 【提言その1】

**文化財はどの地域にも必ず存在するものであるが、知られていない現状がある。文化財について知る・調べやすい仕組み、機会を増やし、地域に対する誇りづくりへの足掛かりとする。**

### 【概要】

具体的な利活用を考える前に、文化財の現状を知ることができる環境を整備することで、保存・活用について考えることに繋げていく。文化財について知ってもらうことが活用の第一歩である。

文化財は指定されているものだけではなく、どの地域にも必ず存在するものであるが、それが知られていない、忘れられつつあるという現状がある。また地元の人は見慣れすぎていてその存在、価値に目が向かないという側面もある。こうした現状が続けば、人々の暮らしの中でつくられてきたものや景観など、地域の文化財の価値喪失にも繋がりがかねない。

そうした状況を改善するために、文化財に関心が薄い人にも知ってもらうための仕掛けづくり、また関心を持った文化財を調べやすい仕組みづくり、特に子どもたちに関心を持ってもらい、文化財への愛着を深める仕組みづくりを行う。

### 【具体的方策】

- 地域の人々が参画し、地域の文化財について学ぶまちあるきイベント等を充実させる。
- 文化財を周遊できるようなデータベースの充実、行政が一方向的に作成するのではなく、地域住民と一緒にパンフレットを作成するなど、地域の文化財を深掘しやすい仕組みを構築する。
- 子どもたちが校外学習等で文化財を訪れた際、実際に文化財を守っている人々の話を聞くことのできる機会を作り、文化財に対する思いを直に感じ取り記憶に刻むことができるような環境を設ける。

## 【提言その2】

**異なる文化財に携わる人々(文化財保存者・団体)の交流の場を設け、文化財の共通理解やつながりを作る。**

### 【概要】

現在、例えば古民家所有者同士の交流会のような、同じような文化財に携わる人同士が交流する機会はあるが、異なる文化財に携わる人々の交流の機会はあまりないため、狭い範囲の交流に止まっている。そこで、異なる文化財に携わる人々をつなぐ仕組みを作り、成功事例・ノウハウの共有や、文化財に対する誇りなど意識の共有を図る。それにより自分の携わる文化財を大切にしようという思いがより一層深まると考える。

多くの鳥取県内の文化財が関わり合うことにより、結び付きが強まることで、新たな価値が付加され、文化財に関心を寄せる人が増え、双方の文化財の維持と鳥取県内の文化財のPR力が一層高まる。

### 【具体的方策】

- 異なる文化財の場へ赴くのはハードルが高いと思われるため、補助金を活用して文化財の保存活動に携わっている人々による活動報告の場を設けるなど、異なる文化財に携わる人々が一堂に会するような機会を設けたり、「県内(指定)文化財所有者の会」等を組織化したりして、情報共有の場を作る。そうした交流を通じて、文化財の普及・活用に係るノウハウの共有等様々な情報交換を行い、成功事例の横展開を図る。例えば、今まで文化財の補修・保全に使用する材料は業者任せになることがほとんどだったが、異なる文化財の存在を知ることによって、補修・保全にその文化財を使用してみようかと考えるきっかけとなり得る(古民家の障子や柱などの補修に鳥取県産の和紙や木の使用を検討する等)。

## 〔提言書2〕

# テーマ2:プラスチックごみ排出ゼロに向けた県民運動の広がり

### 【提言の背景】

2019年6月28日及び29日、G20大阪サミットが開催された。世界経済における貿易問題などが話し合われる一方で、「気候変動・環境・エネルギー」分野においては、2050年までに海洋プラスチックごみ（以下「プラごみ」という。）による新たな汚染をゼロとすることを目指す「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」の実現に向け、取組を進めていくことが話し合われた。海洋プラごみの問題は、今、世界的に注目されている。プラごみを海洋生物が誤飲するほか、5mm以下の小さな粒子となったマイクロプラスチックは、海の生態系に入り込み、食を通じて人体に取り込まれる可能性が指摘されるなど、世界的に深刻な問題である。そのため、各国の自治体がそれぞれ対策に取り組むことが肝要である。

鳥取県では、プラごみゼロを目指し、プラごみの排出抑制・資源循環を積極的に推進するため、県民、企業、行政等、官民一体となって「とっとりプラごみゼロ」にチャレンジしている。

私たちは、どうしたらその取組をさらに進めることができるかを考え、以下のとおりプラごみ削減に向けたアンケート調査を実施し、その結果から、改めて1人ひとりの意識のあり方、環境教育の重要性を強く感じた。

### 【グループ活動】

○岩美町浦富海岸において、地域の方々と清掃活動に参加

○山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館を訪問し、プラごみ削減に関する取り組みについて聴取

○岩美町岩井地区において、鳥取県循環型社会推進課による出前説明会を聴講

○出前説明会参加者に対し、プラごみ削減に関するアンケートを実施

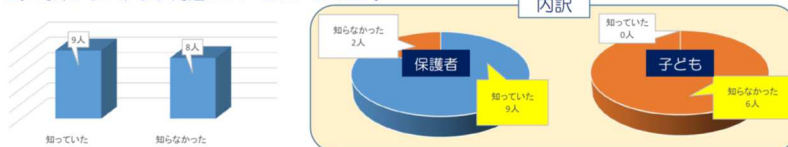


岩美町浦富海岸における清掃活動

### プラスチックごみ削減に向けたアンケート集計結果 若者円卓会議（プラごみチーム）

「プラスチックごみ排出ゼロに向けた県民運動の広がり」に関する提言につなげるため、岩美町岩井地区における鳥取県循環型社会推進課による出前説明会参加者を対象としてアンケートを実施した。  
▶実施日：令和元年8月4日（日）  
▶実施場所：岩美町岩井地区体育館（岩美郡岩美町岩井138）

1. 回答人数 17人（保護者 11人、子ども6人）
2. 海洋プラスチック問題について知っていたか。



3. 説明を聴いて、環境問題に対する意識は変わったか。



4. 今までプラスチックごみ削減のために取り組んできたことはあるか。

- ✓ ごみを集めてごみ箱に捨てる。
- ✓ ごみをポイ捨てしない。
- ✓ 買ったお茶などのペットボトルを捨てずに、また違う飲み物を入れるのに使った。
- ✓ ペットボトルなどはリサイクルする。
- ✓ マイバッグ、水筒を持参する。
- ✓ いらぬ割りばし、ストロー、袋、余分な包装などは断る。
- ✓ ごみの分別をきちんとする。
- ✓ クリーンアップ作戦。
- ✓ 公民館活動のような環境教育。

5. プラスチックごみ削減のためにできることは何だと思うか。

- ✓ ごみを捨てる時はごみ箱に捨てる。ポイ捨てすると生き物がかわいそうだから。
- ✓ 自然を大切に作る。
- ✓ 川、海などにごみを捨てない。
- ✓ 使える物は再利用する。
- ✓ シューズを我慢する。
- ✓ 原材料の見直し。プラスチックに代わる物が普及すること。
- ✓ 地域住民の意識改革。
- ✓ リサイクルできる物はリサイクルする。
- ✓ 1人1人の心がけ（リサイクルする・ごみを減らす）。
- ✓ ごみをしかるべき所へ捨てる。
- ✓ ごみを見つけたら拾う。
- ✓ 意識の高揚を図る。
- ✓ ごみは洗浄して分別する。
- ✓ プラスチックを使用しないという意識を持続しつつ生活する。
- ✓ 買い物時不要物を買わないようにする。
- ✓ やはり各人の自覚。
- ✓ プラスチック問題に関して皆が知識を持つこと、情報を得ること。もっと学校や地域で情報の共有をすること。プラスチックごみが環境や人に与える悪影響をもっと知った方がよい。1人1人が危機感を持つこと。

## 【提言その1】

### 「プラスチック削減の先進県」を目指し、広報活動をより一層拡大する。

#### 【概要】

プラスチック削減のためには、まずプラスチック問題について1人ひとりに正しく理解してもらって意識改革を行い、行動に移してもらうことが必要である。プラスチック削減に関するアンケートの結果や、フィールドワークにおける浦富海岸の清掃時、バス停にごみが放置されている現状を目にしたとき、やはり1人ひとりがごみを持ち帰ったり、ごみ箱にきちんと捨てたりする意識を持ち、行動することが、プラスチック排出ゼロにつながると感じた。

プラスチック削減の啓発を行う際には、特に、「プラスチック問題について知っていたが、面倒だから対策を行っていない」という人たちを中心に意識を変えてもらうことが重要であり、プラスチックが環境へ与える影響を正しく伝えることが必要である。またプラスチック問題は、ごみそのものが悪いわけではなく、きちんと分別すればリサイクルできることから、ごみの分別を徹底させるよう、具体的な行動を促すことも必要である。

#### 【具体的方策】

- CMを活用するなど、メディアによるプラスチック削減の広報を行い、意識改革を図る。
- ドキュメンタリーDVDを作成し、企業や学校などに広く貸し出しを行い、プラスチック問題について考えてもらう。
- 多くの人が集まる場所に、プラスチック削減について訴えかけるようなポスターを掲示する。
- 県民の意識を動かすような効果的なキャッチコピーを県民へ募集し、それを用いて広報活動を行う。

## 【提言その2】

### 環境問題に関して大学生サポーターと子どもたちをつなぐ仕組みを作り、プラスチック問題についての現状や、プラスチックを減らすことの大切さを伝える。

#### 【概要】

次世代にプラスチック問題の現状及び削減の重要性について教育することは、将来的なプラスチックごみの減少へとつながると考えられる。その際は、単に子どもたちに机上で学習させるのではなく、岩美町岩井地区で行われていた、清掃活動と学びを一体化させた体験型学習のように、活動しながら、遊びながら学んでもらうことが効果的と考える。

また、その実施者を募るための仕組みづくりも必要となる。現在鳥取県内の大学には、環境に関する活動や子どもたちへの教育を行っているボランティア団体が複数存在しているが、現状では環境問題に関してそれらの団体が子どもたちと関わる機会はほとんどない。そのような団体と子どもたちをつなぐ仕組みを作ることで、子どもたちにとってより良い学びの機会を提供することができると考える。

#### 【具体的方策】

- 登録制度を設けるなどして、環境問題を学んでいる・興味のある大学生や団体と子どもたちをつなぐ仕組みづくりを行う。そして子どもたちに体験型学習を行い、プラスチック問題について理解を深め、日常生活において自分たちにできることは何なのか考えてもらう。
- 体験型学習に一定の質を保つため、外部から講師を招くなどして、大学生向けの講習会を開催するとともに、活動に必要な補助を行う。

## 【メンバーの主な意見】

### 【テーマ1:文化財の利活用を通じたふるさとの「誇り」づくり】

- 文化財について立派であるか立派でないかに差はなく、その文化財について理解しないと、その価値も分かってもらえない。そして所有者の方にとっては、その価値を理解してもらえることが喜びになるのではないかと感じた。
- 近所の人ほど、文化財のある環境が当たり前で、その存在をあまり意識しないことが多いと感じた。
- 最も近いはずの近所との関わりが薄い所もある。
- 文化財を通じて、地域の文化そのものも感じてもらえる仕組みがあれば良いのではと思った。
- 文化財を正しく紹介できる方が少なくなってきたのではと感じた。
- 古民家住宅の庭の整備を行う方に話を伺ったが、「文化財は地域の宝であり、生きる力である。私の所には何もないと言う人が多いが、人が住んでいる以上文化財は必ずある。その存在に気付かないだけであり、またそこには、その文化財を支える人々もいる」という言葉が印象に残った。
- お寺の境内でかくれんぼして遊んだ思い出などを地域の方から聞いたが、やはり幼い頃文化財と関わった記憶は残っているのだと思った。
- 幼い頃から文化財のことを知るにより、大人になってからも地域に対し誇りや関わりを持ってもらえるような草の芽活動が必要である。
- 地域の小学生・中学生が知らないという部分は、私も仕事をしている中で感じることもあった。
- 文化財を守っている方々は、誇りやこだわりが少なからず同じであると感じた。そのことを強く感じるだけでも、この活動に参加してとても有意義であり、今後も自分の携わる文化財を大切にしていきたいと思うことができた。別の文化財に携わっている若い方がいれば是非交流をしていきたい。

### 【テーマ2:プラスチックごみ排出ゼロに向けた県民運動の広がり】

- 浦富海岸の清掃活動に参加したが、思っていたよりごみが少なく、きれいな印象を受けた。日頃から地域の方々が清掃活動されている努力があつてこそということを感じ、地域の方々が一丸となって自分たちの地域をきれいにしようとされている取り組みは素晴らしいと思った。
- 清掃していく中で、小さなプラスチックごみや発泡スチロールの破片がたくさんあり、こうしたごみがマイクロプラスチックになるのだと実感した。
- 清掃活動や出前説明会には小学生も多く参加しており、一生懸命ごみを拾ったり説明を聴いていたりしたので、学校などでプラごみに関する教育を進めることも有効だと感じた。
- 子どもたちはなかなか新聞を読む機会が少なく、YouTubeなどでも自分の興味のあるものしか見ない傾向があることから、学校や学童などのような決められた場所で教育を行う必要がある。
- 自分たちも環境に関する教育を受けてきたが、いつも新しい発見があつた。
- プラごみ問題については、知らないという人よりも、知っていたが何もしていないという人の方が多いのではないかなと思う。
- 環境の問題は、周囲の環境がいくら変わったとしても、結局は自己の環境への意識が高くないと行動につながっていかないのではないかな。
- 漠然とプラごみを減らしましょうと呼びかけるのではなく、具体的にどのような問題が現状で発生しており、今後どのような問題が新たに発生するのか伝えるのが重要ではないかなと思う。
- 海だけでなく山でもプラごみは問題。登山ブームで、登山者の捨てたごみが問題となっている。
- 今回は岩井地区という岩美町の山側の地域でアンケート調査を行ったが、海側の地域でもアンケート調査を行っていけば、考え方の違いなどがあるかどうか分かり、面白かったかもしれない。